

2025年、団塊の世代が75歳以上の後期高齢者になる。本格的な高齢化社会の到来だ。求められる医療の形も大きく変わる。それに向けて、県は今春、第7次保健医療計画を発表した。岡山の地域医療はどう変わるのか。課題と、解決に向けた現場の動きを紹介する。

ライバルから共生へ

地域医療は今 上

2病院共倒れ回避

真庭市にある六つの一般病院のうち、最大の二つ、落合病院（1937年開業、173床）と金田病院（51年開業、172床）は、旭川を挟み、向かい合う。直線距離でわずか約400mしか離れていない。

規模も設備もほぼ同等。地域の医療を支えるライバルとして、長年激しく競ってきた。住民は戦国時代になぞらえ「川中島の戦い」と呼んだ。

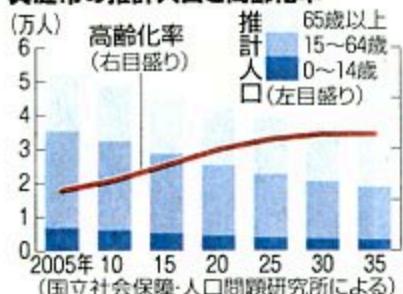
真庭市の人口は、2005年に合併した時の約5万

2千人から減り続け、現在は約4万7400人、25年には約4万人と推計されている。一方、65歳以上の高齢者の割合は上がり続けており、25年には4割を超える見通しだ。

人口構成の移り変わりに



真庭市の推計人口と高齢化率



基づき、県は今春、真庭市で25年に必要な病床数を約460床と試算し、発表した。現在、市内6病院の計約600床を大幅に下回る。過剰感は、すでにある。

落合病院の安東正典事務局長は「稼働率がじわりと落ちていると感じる」と話す。

09年、隣接する津山市の過剰感は、すでにある。落合病院の安東正典事務局長は「稼働率がじわりと落ちていると感じる」と話す。

落合病院は、人工透析をする50床の腎センターやドクターへりの発着場など、市内唯一の設備を持つ。産婦人科の常勤医がおり、お産が出来る病院もここだけだ。一方の金田病院は、整協調へ」だった。

どうするか。出した結論は「競争から特性生かし補完」だ。一方の金田病院は、人工透析をする50床の腎センターやドクターへりの発着場など、市内唯一の設備を持つ。産婦人科の常勤医がおり、お産が出来る病院もここだけだ。一方の金田病院は、整協調へ」だった。

そして昨年11月、両病院は「連携協力の推進に関する協定」に調印した。地域完結型の医療の推進や、医療機器の相互支援などをうたう。

野市でも、模索が始まつた。市民病院、玉野三井病院、岡山赤十字病院玉野分院は、いずれも医師不足に苦しみ、経営も厳しい。

玉野三井病院の磯嶋浩二院長は「他の中小病院も医師が高齢化している。地域の中心となる救急の維持は限界に近い。市全体で再編成が必要だ」と話す。

玉野

市全体で再編模索

解決策を探るため、3病院と市、医師会、岡山大などが「玉野市地域医療連携推進協議会」を結成。4月27日に初会合を開いた。来年始まる地域医療連携推進法人制度などを使い、連携を円滑に進めたい考えだ。

しかし、市・企業・日本赤十字社と、経営母体が大きく異なる3病院が、譲り合い、役割分担を整えるのが容易ではない。3病院は玉野の医療を支えきれると、正念場を迎えていた。

今、患者に渡す両病院の外来診療表は、片面に落合病院、もう片面に金田病院の表を印刷している。両病院が受け持つ診療を、地域の人に分かりやすく伝えられた。地域医療構想に詳しい産業医大（北九州）の松田晋哉教授は、この診療表を「病院共生」という新しい医療の象徴」と見る。

課題はまだ多い。だが後戻りする道はない。金田病院の金田道弘理事長はこう話す。「戦いの先に、地域の明日はありませんから」